31

ヴェサリウス解剖学の構成とその起源について

坂井建雄

ブリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウス（一五一四―一五六四）は、一五四三年に出版した『ファブリカ』と『エピトメー』という二冊の解剖学書によって、科学としての解剖学を築き、現代医学にいたる道を切り開いた。『ファブリカ』の巻と章の表題を訳出し、また『エピトメー』については既存の訳書を用いて、それぞれの内容と構成を検討したところ、両者はともに現在の解剖学書とは全く異なる構成を持ち、かつ両者は互いに異なることが分かった。すなわち、『ファブリカ』の七巻では、はじめの四巻が骨格、筋、血管、神経というように素朴な素材系統的な編成を持ち、後半の三巻は、腹部内臓、胸部内臓、頭部内臓という局所解剖的な編成をもつ。それに対し『エピトメー』の六章は、最初の二章で骨格と筋、最後の章で生殖器を扱うが、中間の三章は、消化器と静脈系、心臓と動脈系、脳と神経というように分かたれ、ガレノス生理学に基づいた機能系統的な編成を持っている。『エピトメー』は、『ファブリカ』の解剖所見を、ガレノス説に基づいて最大限に圧縮した教科書という性格をもつ。『エピトメー』の構成に対応する解剖学書は、それ以前にもまたそれ以後にも、知られていない。

『ファブリカ』の素材系統的と局所解剖的を抱き合わせた折衷的な構成についても、ヴェサリウス以前に類似のものは認められないが、その要素となる素材系統的な解剖学書と、局所解剖的な解剖学書については、ヴェサリウス以前にそれぞれ例がある。

ヴェサリウス以前の素材系統別の解剖学書としては、アヴィセンナの『医学典範』がある。この第一巻第一部「医学の定義とその自然的主題」の六教則の中の第五教則でアヴィセンナは、全身の骨、筋、神経、動脈、静脈を扱っている。さらに遡れば、ガレノスは『解剖手技』の中で、たとえば上肢と下肢について、まず骨と筋を扱い（第一巻と第二巻）、それから上下肢の神経、静脈、動脈

を扱っている（第三巻）。人体の素材系統的な扱いは、直感的に分かりやすいもので、内容的にはガレノスにまで遡りうるものである。

『ファブリカ』の中の局所解剖的な要素の起源は、中世のモンディーノの解剖学に求めることができる。モンディーノは、保存処理を施さないご遺体で全身を解剖するために、腐りやすい腹部内臓から始め、続いて胸部内臓、そして頭部、最後に四肢の解剖をするという順序を、『アナトミア』の中で採用している。全身の解剖を、腹部→胸部→頭部→四肢と進めていく局所解剖的な配列は、ヴェサリウスの頃の解剖学の伝統となっていたと思われ、ベレンガリオ・ダ・カルピの『イサゴーゲ・ブレヴェス』も、同じ配列を取っている。

ヴェサリウスは、それ以前の素材系統的と局所解剖的の二つの解剖学の伝統を組み合わせ、全身の構造を網羅して記述するための新しい枠組みを作り上げた。局所解剖的な枠組みには、分かりにくさがつきまとう。素材系統的な枠組みは、直感的に分かりやすいが、腹部・胸部・頭部の臓器がはみ出てしまう。ヴェサリウスは、この両者を組み合わせることにより、分かりやすくかつ全身を網羅できる枠組みを新たに作り上げた。

自らの手で解剖を行うという観察至上主義とともに、全身の構造をくまなく記述していく枚挙網羅主義は、ヴェサリウスの解剖学書を成功させ、現代医学への道を切り開いた大きな原動力であった。その中で、ヴェサリウスが枚挙網羅のために必要な、解剖学書の新しい枠組みを創造したことは、注目かつ評価されていいことではないだろうか。

（順天堂大学医学部第一解剖学）